

常照

佛教大学附属図書館報

2015

NO. 62



佛教大学附属図書館

大学図書館は、大学における学術情報基盤の中枢と位置づけられています。いわば本学における学術情報の収集・発信の中心といってもよいでしょう。

本学の図書館には近代以前の古今東西の典籍はもとより、現代に至るまでの図書資料がおよそ一〇〇万冊收藏されており、その他に約二万三〇〇〇タイトルの学術雑誌、インターネットを通じて利用できる電子ジャーナルやデータ

ベースなどの電子資料を含めれば、まさに膨大な知識の宝庫と呼ぶことができます。

本学で学ばれる通学課程、通信教育課程の学生の皆さんをはじめ、教職員や一般の利用者の方々は、図書館を利用することによって、様々な知識を獲得しておられるのです。しかし、こうした図書館資料を通して、自ら修得した知識が蓄積されていくだけでは、本当に学んだということが言えるでしょうか。



ご挨拶

佛教大学長 田中典彦

1

図書館から情報の森へ

附属図書館長・仏教学部教授 松田和信

3

緑りの一冊 『浄土宗の成立と展開』

浄土門主・浄土宗総本山知恩院門跡 伊藤唯真猊下

4

Interview

仏教美術研究の中で出会った一冊

仏教学部仏教学科教授 大西磨希子

12

保育の歴史的研究と実践記録集(復刻版)の刊行に寄せて

社会福祉学部社会福祉学科教授 渡邊保博

16

新収資料紹介 『京都上京 中小川町文書』

歴史学部歴史文化学科教授 渡邊秀一

20

BIRDとお気軽検索の活用

図書館専門員 飯野勝則

24

佛教大学附属図書館の事業活動報告 2014～2015年度前半期

28

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

29

真に学ぶということは、本学の建学の理念である仏教精神、とくにそのなかでも人間形成にとって重要な「転識得智（てんじきとくち）」ということに通じるものであるといえます。つまり、知識を転じて智慧（知性）を得るということ、われわれが得てきた知識をもって、人生のさまざまな場において、今何をすべきかを判断することができ、実行してゆく力へと転換してゆくことにはかならないということです。

さて、図書館の正面玄関の左脇に石碑が建っております。これには浄土宗の宗祖法然上人の御遺訓「枚起請文」の二節である「智者のふるまひをせずして、ただ一向に念仏すべし」が刻まれております。法然上人は、末法の世とも呼ばれた平安末期の戦乱や自然災害の時代にあつて、万人が平等に救われる教えを求めて、膨大な経典である一切経を読まれること数回に及んだと言われています。

そして、唐の善導大師が著された『観無量寿経疏』のなかに、南無阿弥陀仏と唱えることによって、すべての人々が平等に救われると記されていることを見出され、この教えを広められました。このように、法然上人は大変な学問を積まれて、万

人救済の教えを発見されたわけですが、それでも自らを「愚痴の法然房」と称され、自分は何も知らない愚かな者として自覚し、ひたすら阿弥陀仏の慈悲を信じて自ら念仏の道に生きるとともに、人々に念仏しなさいということを書き残されています。

われわれはすでに知っていること（既知）よりも、未だ知らないこと（未知）の事柄が、いかに多いかということに自覚し、そうした真摯な態度で図書館を利用することが大切なことなのではないでしょうか。言い換えれば、自分はまだまだ知らないことが沢山あるのだと自覚し、学び続けることで、自分自身をよりよくすることができ、多くの人々の役に立つ人間になろうと努力しているといつてもよいでしょう。

図書館の扉を開けることは、まさに浄土三部経の『無量寿経』にあるように、自らが「かの智慧の眼を開きて、この昏盲の闇を滅し、もろもろの悪道を閉塞して、善趣の門に通達せしめ」ることにほかなりません。どうか利用者の皆さんも、この図書館で智慧の眼を開いていただき、常に新たな発見を続けていただきたいと願っています。



附属図書館長・仏教学部教授
松田 和信

図書館から情報の森へ

図書館で利用できる資料は、手にとつて見る書物だけでなく、世界の隅々まで張り巡らされたインターネットを通して閲覧できる電子ジャーナルやデータベースなど、様々な形態のものがああります。本学の図書館は、大学の規模から見ると、他に誇るべき二〇〇万冊もの書物を所蔵しています。しかし人間の歴史が積み重ねて来た知識の総量に比べると、一〇〇万冊など氷山の一角にすら及ばないでしょう。ところがインターネットの普及によって状況は大きく変わりました。図書館の提供するネットサービスを通して、図書館内の端末や皆さんのコンピュータあるいはスマートフォンから二〇〇万冊をはるかに超える巨大な情報に直接アクセスできるようになったのです。形のある書物にこだわる私のような人間も図書館の役割が以前と大きく変わったことは認めざるを得ません。いまや図書館は巨大な情報の森への入り口にほかならないのです。

私自身は仏教学部の教員として授業を行うほかに、一人の研究者として古代インド語で記された仏教文献の解読研究を続けています。仏教の研究者は日本には千人程度しかいませんが、海外に目を転じれば万を超す研究者が仏教の真実を求め

て研究を続けているのです。仏教は古代インドに誕生しましたが、現在のインドに仏教は残っていません。もし残っていたらインドの僧院を訪ねて僧侶から直接話を聞けば良いのかも知れません。しかし仏教の研究は文字資料、つまり残された書物に耳を傾けることから始めるしかないのです。私の研究も書物なしでは成り立ちません。

以前は図書館にない論文や書物を求めて大変な苦勞をしたものです。しかし今は研究者であれば自分のネットワークを通して資料を入手することもそう難しい時代ではありません。メールで頼めば、時間後には海外の研究者から求める論文が届く時代です。しかし学生や院生の皆さんはまだそうはいきません。本学の図書館では、この四月からホームページ上で学術情報検索（BIRD）のサービスを開始しました。このサービスは誰でもどこからでも利用できます。これを利用すれば本学図書館の蔵書に加えて世界の膨大な情報にアクセスできます。図書館のスタッフもサービスの向上をめざして日々努力を続けています。皆さんも佛教大学の図書館から世界の情報の森に分け入ってみませんか。





伊藤唯真猊下のプロフィール
浄土門主・浄土宗総本山知恩院門跡。佛敎大学名誉敎授。佛敎大学仏敎学部卒業、同志社大学文学研究科博士課程単位取得修了。佛敎大学文学部敎授を経て、佛敎大学長、京都文教短期大学長、学校法人家政学園長を歴任。浄土宗大本山清浄華院第81世法主を経て現職。著書に『日本人の信仰未知へのやすらぎ 阿弥陀』、『浄土宗の成立と展開』、『仏敎と民俗宗教』、『伊藤唯真著作集』全4巻、『法然の世紀』、『日本人と民俗信仰』、『法然上人の言葉「法然上人絵伝」より』ほか多数。

縁りの一冊

伊藤唯真著

『浄土宗の成立と展開』

平成24年（2012）10月、佛敎大学は開学百周年を迎えました。昭和24年（1949）4月に

大学に昇格して以来、附属図書館（成徳常照館）は開学50周年、60周年の記念事業として整備拡充が続けられてきました。開学80周年記念事業として平成9年（1997）4月に竣工した現在の附属図書館には、開学以来本学の敎育研究を支えてこられた先学の著作が数多く所蔵されています。

今号より、そうした本学の敎育研究に携わってこられた方々が在職時に出版された代表的な著作を取り上げて、その当時の想い出や研究の一端をお伺いすることとしました。第一回は浄土門主、浄土宗総本山知恩院門跡、本学名誉敎授の伊藤唯真猊下が、昭和56年（1981）6月に出版された『浄土宗の成立と展開』（吉川弘文館・第13回浄土宗學術賞受賞）について、お伺いしました。

聞き手 佛敎大学附属図書館参与 松島吉和

聖仏敎の研究事始め

松島 伊藤唯真猊下におかれましては、ご多忙のところ貴重なお時間を頂戴いたしまして、厚く御礼申し上げます。本日は猊下が法然上人による浄土宗開宗前後を中心とした研究をまとめられ上梓された御著書である『浄土宗の成立と展開』について、お話しをお伺いいたしたく存じます。

この御著書は今日でも浄土宗の成立期を研究するための必読書となっておりますので、図書館に配架されているものはこのように大変使い込まれております。

猊下は御著書の「はじめに」で、「日本仏敎の展開は、従来、高僧の著作や伝記によつて跡づけられる傾向にあったが、高僧の仏敎はいわば日本仏敎の表層にしか過ぎない。日本仏敎の研究には、この『表層仏敎』に対する『基層仏敎』の領域こそ、もっと明かす必要がある。この基層仏敎を領導したのは無名無数の庶民敎化者である。彼らは、日本仏敎史の各時代に通じた名称でいえば、聖（ひじり）と呼ばれる敎化者であった。この聖の仏敎こそ、日本仏敎の基層をなすものであり、聖仏敎史の体系的把握は日本仏敎研究上の重要な課題である」と記されております。猊下が聖仏敎に着目されたのは、どういうところからだったのでしょうか。

伊藤 私は佛敎大学の学部生の頃は、仏敎学を学んでいました。卒業論文は『金剛般若経』の研究でした。その頃、佛敎大学にはまだ大学院がありませんでしたから、卒業して大学院を目指すにしても、大谷大学へ行くか龍谷大学へ行くか、その二つしか思い浮かばなかったのです。それもいいだろうと思っていたところに、

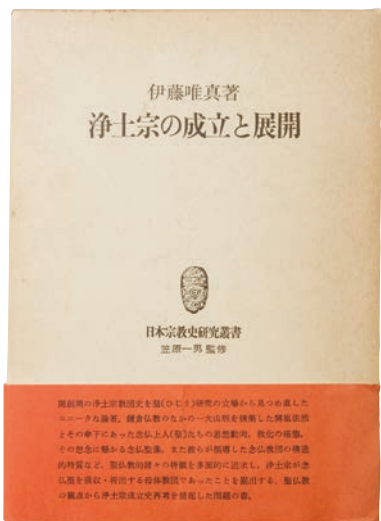
当時東山高等学校の校長であつた藤原弘道先生から、同志社大学に法然上人のことを研究している石田一良という先生がいますと教えていただきました。

その石田先生の勉強会へ行っていたのが平祐史先生（佛敎大学名誉敎授）で、平さんにその勉強会へ誘っていただいたのがきっかけです。その後同志社大学大学院文学研究科に入学して、石田先生に師事しました。先生は当時浄土敎美術を文化史学の立場から考察されていて、恵心僧都源信から法然上人、親鸞聖人へと続く日本浄土敎の形成史を研究されておられました。

この三人の高僧は私が言うところの表層仏敎の人だったわけですが、石田先生から三人の周辺には著名な僧侶や学僧などのほかに、民衆との接点をもった聖と呼ばれる敎化者がいるから、君は聖の研究をしてみたらどうかとご敎示を受けて、それで聖の研究を始めたわけです。

平安時代の中頃から、慶滋保胤の『日本往生極楽記』をはじめとして、いくつもの往生伝が著わされました。往生伝の中には、その史料には名前を残すけれども、純然たる学僧でもない人たちが大勢いて、極楽浄土への往生を願つて修行していた者もあれば、民間にも文人貴族や学者のグループがありました。学者や学僧の世界と、それを敎育している比叡山延暦寺（天台宗）といったような、現在の大学にあたる最高学府がありました。

また、それとは別に比叡山の麓には別所⁽²⁾といつて、地理的にも文化的にも都からは離れているけれども、実際に自分の身体でもって信仰を伝えたり、敎えを説いていたりした人たちがいました。またそのような人々から自分たちの信仰を得ていた民衆が底辺にいますと





うことを、自分で見出すことができて、聖の仏教を研究することが面白くなってきたのです。

そのような人々が持っている考え方とか文化とか歴史とかを探索してみよう、浮き上がらせてみようということに気づいたのです。なぜそれに気づいたかといえば、私は都会で育った人間ではありません。滋賀県の田舎、山奥で育った人間ですから、とくに自分の住んでいた地域と関係があつて、自分が生まれ育つた、あるいは住んでいた地方の集落、山間の村々が持っている意識文化とか生活文化とかに、自分自身が浸っているものだから、自然とそういう世界の人々を歴史の中で掘り出してみようと思つたわけです。

それで、修士課程の研究テーマが聖の研究で、石田先生の指導の下で「聖放^{（たうほう）}」という題目で修士論文を書きました。

民俗学への誘い

伊藤 大学院では、石田先生にご指導いただきましたが、そのことは別に、竹田聰洲先生との出会いは、佛教大学の3回生の頃のことになります。

竹田先生は当時諸大学の講師として教鞭を執っておられました。竹田先生は長崎県の平戸学術調査団を組織して、竹田先生はこれに参加され民俗部門を担当されていました。その調査の写真を竹田先生から見せていただきました。平戸の宗教民俗について、こういうものがあるのだという、それが竹田先生との最初の出会いです。佛教大学に民俗学に興味を持っている学生がいると、先生に知ってもらつたわけです。

私の研究領域は仏教と歴史と民俗と三分野にわたっているのですが、三分野を二つに集約した課題が聖というものであつたと言えますね。そんなことから私の関心は、民俗学へも足を踏み入れていくことになりました。その当時同志社大学大学院に、竹田先生にも学問上の影響を与えられた三品彰英先生が赴任してこれらたということもあつて、私は三品先生にも指導を受けました。

そのお二人の先生は後年佛教大学文学部史学科の教授として着任されましたので、職場を同じくしてご指導をいただきました。そういう意味では学生時代の関係が史学科の発展にもつながつて行つたと言えるかもしれません。

松島 三品彰英先生のお名前をお聞きして、かつて『新羅花郎の研究』を読んだことを思い出しました。また、竹田先生には学生時代に柳田国男の『遠野物語』、『明治大正世相篇』の原典講読や、近世の寺檀制度、村落寺院の実態や両墓制についての講義を受けました。その際の厳しいなかにも、やさしさを感じさせられる御顔を思い出します。私は猊下の指導教授はずっと竹田先生だと思つておりましたが、実際には石田先生、竹田先生そして三品先生のご指導を受けられたわけですね。

研究会での切磋琢磨

伊藤 そうです。石田先生、竹田先生のお二人は、京都大学の伝統的な国史・文化史学の主導者であつた西田直二郎先生の系統を受け継いでおられるし、三品先生は歴史学だけではなく、文化人類学、民族学、考古

学や神話学などを総合的に研究され、その比較研究に立脚されています。私が比較研究という方法に注目するようになったのも、そういった先生方に教えを受けたからです。

私もまだ若かつたので、万巻の書が詰まつた部屋の中で閉じこもつてするのも研究だけれど、研究者仲間と交流していくことが大事だということに思い至りました。とくに刺激を与えていただいたのは、仏教史学会の編集委員会に入つてからのことで、私が大学院の時に竹田聰洲先生が仏教史学会の編集委員会の委員長をされていたのが縁でした。私もいろんな事務のお手伝いに行きましたが、そこへ他大学で宗教史を研究している研究者が集まつておられました。そういった方々との交流ができ、研究仲間ができたのです。竹田先生を中心に京都にできた研究仲間は、龍谷大学や大谷大学といった私立大学はもとより、京都大学など国立大学の方々とも広く知り合いになりました。そして刺激を受け合い、お互いに意見を言い合えるサロンができていったわけです。

その頃、関東では東京大学教授の笠原一男先生を中心とした日本宗教史研究会が活動していました。昭和40年（1965）からこの関西・関東の二つの研究会が、毎年夏に集まつて二泊三日で、古文書などの史料を所蔵している社寺を会場として、サマーセミナーを開催することになりました。このサマーセミナーで、東西の研究者が顔見知りになつて、研究した内容をお互いに発表して論評し合うということで、随分啓発されたものでした。

そうした東西の研究者による研究の成果を叢書として出版しようと企画されたのが、笠原先生で、日本宗

教史研究叢書が刊行される運びとなりました。私も、その中に一冊書くようにと薦められ、今まで発表したものをまとめる機会を与えていただいたのです。この本を出版したのは、もう三十四年以上前のことで、収録されている論文のなかには、古いものでは今から五十年も前のものもありますが、法然上人が浄土宗を開宗された前後の状況を研究した内容を中心に編集したものです。早くから出版を依頼されていたが、なかなかまとめられず、ようやく聖が多出する、源智上人が造立された阿弥陀如来立像の結縁交名^{（けちえんまうみょう）}の存在がわかつてから一挙に書き上げたというわけです。

法然上人伝研究会の頃

伊藤 法然上人に関する著書を出版するきっかけとして、私の研究に大きな影響を与えていただいた研究グループがもう一つあつたことを忘れてはなりません。それは浄土門主・浄土宗総本山知恩院門跡であつた岸信宏猊下が主催されていた法然上人伝研究会で、その発足は昭和24年（1949）8月に遡ります。その後法然上人七百五十年遠忌を記念して『法然上人傳の成立史的研究』の第一巻が、昭和36年（1961）1月に刊行されました。この研究会は法然上人の諸伝記を比較対照し、その成立過程を研究するというのが目的でした。岸御門主猊下の下で、三田全信先生、香月乗光先生、藤堂恭俊先生（後に、浄土宗大本山増上寺第86世法主）、私の父伊藤真徹という老先生方、平先生、成田俊治先生（佛教大学名誉教授）、私の若手三人の七人で月に一回集まつて研究会を行っていました。それが私の法然上人の伝記研究の始まりです。

松島 『法然上人傳の成立史的研究』の第一巻から第三巻までに収録されている、浄土宗総本山知恩院所蔵の『法然上人行状絵図』（国宝、四十八巻伝）を中心として、他の8種の諸本の記事を、比較対照された研究は、今日でも法然上人の伝記を研究する上で、基本とされる素晴らしい業績だといわれています。

伊藤 法然上人伝研究会では、あの本文の比較対照の成果をまとめるべく作業を進めていました。そして研究会のメンバーが研究した内容を、第四巻に研究篇としてまとめられたものが、昭和40年（1965）3月に刊行されました。

松島 昭和36年の法然上人の七百五十年御遠忌を契機に、法然上人に関する研究が著しく盛んになったと、昭和45年（1970）8月に出版された『浄土宗開創期の研究』の序文に、香月乗光先生が記されています。**伊藤** 私もこの香月乗光編著『浄土宗開創期の研究』に「遊蓮房円照と法然―法然下山問題の新視点―」という論文を収録していただきました。今まで誰も注目されていなかった法然上人と遊蓮房円照との関連を研究したものです。

松島 この猊下の御研究では、「実は伝記上空白のこの時期にこそ、浄土宗の開創、比叡下山といった文字通りの画期的な実績が含まれている」と記され、開宗前後の後白河院政期における法然上人周辺の人物として、遊蓮房円照を取り上げられ、そこから法然上人の宗教の形成について考察されておられますね。

伊藤 法然上人が初めは源信の『往生要集』に導かれ、後には唐の善導大師の『観経疏』を読まれて、称名による凡夫往生の道理を見出されたことは皆さんもご存知のことですが、『法然上人行状絵図』の巻四十四に、

「上人つねには、『浄土の法門と遊蓮房とにあへるこそ、人界の生うけたる思出にて侍れ』とぞおほせられける」とあるように、法然上人にとっては、浄土の法門と遊蓮房に出会ったことが生涯の思い出であると言っておられることは、これまで見過ごされてきました。伝記には記されているのですが、そのことを誰も詳しくは研究されてこなかったのです。それで、私は遊蓮房円照のことを調べ、その姻戚関係、師弟関係、師檀関係がわかる系図を作ってみました。

この遊蓮房は平治の乱で亡くなった藤原通憲（信西）の息子で、その兄弟には、法然上人の周辺の著名な人々の名前が次々と出てきます。たとえば、天台宗の僧で安居院流の唱導の大家であった澄憲、興福寺の学僧の覚憲、東大寺に学び高野山に通世した明遍などがそれです。

浄土宗史や、浄土宗教団の研究だけをしていたのではわからなかったことが、明らかになってきました。遊蓮房円照もまた善導大師の称名念仏に帰依していたということから、法然上人は彼に会うために、比叡山の別所であった黒谷（現在の青龍寺）を下りて、遊蓮房が住んでいた広谷へ行かれた。これが法然上人の比叡下山ということに繋がってゆくのです。それで降法然上人は比叡山へは帰られずに、ずっと東山の吉水の地におられた、というような経過もわかってきたので、そのことを論文にして発表しました。

松島 この『浄土宗開創期の研究』は、思想篇と歴史篇に分かれていて法然上人の浄土宗開宗に関する重要な研究が収録されています。とくに巻末には、戦後の法然上人研究の動向がまとめられていて、思想篇を高橋弘次台下（浄土宗大本山黒谷金戒光明寺法主・佛教

大学名誉教授）が、歴史篇を伊藤猊下がご執筆になっておられますね。

伊藤 この『浄土宗開創期の研究』には、先程お話ししました法然上人伝研究会のメンバーであった香月先生、藤堂先生をはじめ、成田先生や平先生も執筆されています。こうした共同研究を通して、個人的にも啓発されて新しい論文が執筆でき、さらに共同研究を積み重ねることで、新しい領域の研究を進めていくことができるという二重の意味でのプラスがあったといえます。

浄土宗を基盤とした研究会の中での成果が、この『法然上人傳の成立史的研究』全四巻であり、浄土宗内の碩学と若手の研究者が一緒になって取り組んだ、私には思い出深い研究会です。最初に申し上げた、私の三分野の研究のうちの一つである仏教の分野での大きな刺激を与えていただいたグループということができま

表層文化と基層文化

伊藤 歴史の分野で影響を受けたのは、やはり竹田先生の仏教史学会のグループですね。それから民俗学の研究も大学院を修了し、昭和36年4月に佛教大学の講師になった頃から始めて、いくつか論文を執筆してきました。それらは昭和59年（1984）9月に『仏教と民俗宗教―日本仏教民俗論―』（国書刊行会）という論文集にまとめました。

ちょうど民俗学の研究を始めた頃、『中世祭祀組織の研究』を著わされた萩原龍夫先生が調査で滋賀県に來られて、私が住職をしていた上砥山の浄西寺（滋賀県栗東市）に泊まりました。昭和39年（1964）

のことで、その時所蔵していた萩原先生の著書に署名していただき、「湖国近江に生涯の友を得たり、何の喜びかこれにしかん」と認めていただきました。私が三十代初めことです。

松島 ここまでお聞きしてまいりまして、猊下は仏教歴史、民俗という三つの分野から、それぞれが持つている要素をうまく抽出され、それを二つの研究方法としてまとめられたと言ってもよいのではないかと思います。ですが、いかがでしょうか。

伊藤 たとえば、歴史の視点から「民衆」といえば階級概念がありますね。しかし、民俗学ではそれを常民というわけです。上層、下層と言えばこれも上下の階級的な概念が入ってしまいますが、民俗学では表層と基層という見方をします。両者には通有性があります。私はどちらかと言えば基層の方ばかり見ていた（笑）。

松島 実はそのところが一番お聞きしたかったので、猊下の御研究はやはり民俗学が基盤にあるのではないかと思います。ただ、それだけではないだろうと拝察いたしておりました。そのことを今日お聞きできればと思つてまいりました。

伊藤 基層といえは、ゴルフボールの中心部分と言えばよいでしょうか。拙著『仏教と民俗宗教』の「はしがき」に、「歴史には『可変』と『不変』の要素、生活には「非常」と「常」の局面があるが、この不変にして常的な性格を基層として、国民文化が成り立っている。国民文化を歴史的、地域的、階層的次元で区分するのではなく、層序的次元で表層文化と基層文化とに分けることを初めて開発したのは民俗学である。従来の歴史学は主として記録に基づいて表層文化を扱っていた。基層文化は記録されることが少ないため、文献史学にはアプロー



伊藤猊下ご自身の書き込みがされた年譜・著作目録



チの道が閉ざされていたからである。しかし、記録がないからといって、どうして無記録の世界の探求を無価値と断定することができようか」と記しましたように、歴史には変わる面と変わらない面がありますが、民俗や文化には、時代を超えてコンスタントかつポピュラーに伝わってきた素質というものがありません。それを見極めるためには、どうしても歴史と民俗の領域だけではなく、文化の領域と言いますか、別の概念でいえば、宗教的なものが重要になるわけですね。宗教、歴史、民俗という分野にわたりながら、日本人の中にある、あるいは日本文化の中にあるコンスタントかつポピュラーな素質と言うべきものとは何だろう。それが各時代にどのように変化して表れてきたのか、表層の部分よりも前に出てくる基層の部分ということを見てきたというのが、私の研究の特色であるといえます。

広い視野で研究を

松島 私は先日、宮本常一氏の『忘れられた日本人』を読んでおりました、歴史の表舞台に名を残すことのない、農村や漁村など様々な地域に生きてきた人々の営みの中でしか伺い得ることのできない事実を知ることができました。こうした聞き書きの内容は、歴史の史

料からでは到底知ることのできないことです。最近、学生時代に読んでこなかった分野の書籍を読むような心がけていますが、もっと若い時に読んでおけばよかったと反省しています。若い時代に様々な本を読み、いろいろな考え方にふれておくことは、自分のなかに複数の視点を取り入れていくことになり、自身自身の考え方の根本を確立するための素地を育てることに役立つと思います。

そうすれば、何らかの課題に直面した時、自分がどのように対応しなければならぬかということ进行分析できる能力が身につくと思うのです。つまり自分の根本となる考え方を持っていないといけない。それがぐらついていたら、軟弱な地盤の上にくら付け焼刃で足してもだめですね。学問も人間の生き方も基本的なことはそういうことではないでしょうか。

狛下を前にして口幅つたいことを申し上げましたが、これから法然上人、あるいは浄土宗史の研究をされていく若い人たちに向かって、という点に氣をつけて勉強すればよいアドバイスをいただけたらと思います。**伊藤** できるだけ広い視野を持つということでしょうね。自分が研究していることに対して、自分以外の誰よりも、この部分は自分が強く鋭く剔出した世界だというものを持つていることだと思ふのです。ただし、そこにじつと留まっているのではなく、もっと別のところへも目を向けて、そういったところからも一回、自分の研究したところを見直していく、あるいは照らし出してみる。そのことが必要だと思っています。

そういう意味では、浄土宗学、浄土宗史の史料だけではなく、他宗やその他の史料の中からも拾い出していくという作業が大事になってくると思います。

狛下の特別な思いというものがあつたのではないかと感じまして、それをお聞きかせ願えればと思います。

伊藤 この本を出版するまでも『日本人の信仰 未知へのやすらぎ 阿弥陀』などを出版していましたが、この『浄土宗の成立と展開』は、最初は聖研究というものをおまわり表に出さないうで、歴史の研究者に読んでもらいたい、という気持ちがありましたね。言うところの雑学・聖研究は、もっと後になって見直しを立てたものにしたいと思つていました。歴史学の中に聖研究を潜ませて、いずれは「日本仏教」の内実が、聖仏教だということを明かそうとする望みを持っていたのです(笑)。松島君、今日は久しぶりにこんな話ができて、とても楽しい時間を過ごせました。

松島 それが狛下の当時のお気持ちですね。そのことがお伺いできてよかったです。本日は長時間にわたつて、貴重なお話を承ることができました。図書館報『常照』を読んでいただく学生の皆さんにとつて、大変有益なご教示を賜ることができたと存じます。本日は本当にありがとうございます。

(1) 石田一良(1913—2006) 日本史学者。同志社大学教授、東北大学教授、東海大学教授を歴任。著書に『浄土教美術—文化史学的研究序論—』、『文化史学—理論と方法—』など多数。

(2) 寺域内にある空閑地など未開発の地を定めて、そこに造成された宗教施設をいう。仏教諸宗派の修学修行に不満を持った僧侶が聖となつて、隠遁し集団で生活を含んだ場所でもある。

(3) 竹田聰洲(1916—1980) 宗教民俗学者。同志社大学教授、佛教大学教授を歴任。著書に『民俗

松島 南部興福寺の衆徒たちが、朝廷に専修念仏の禁制を求めた「興福寺奏状」ひとつを取り上げても、最近新たな見解が提起され、さらにそれに対する批判や新たな研究がなされています。⁶⁾ 史料を探すだけではなく、史料の読み方にも慎重にならなければなりませんね。そういう意味では幅広く史料を探すだけではなく、なおかつ自分の視野も拡げていきなさいということですね。

伊藤 一例をあげますと、法然上人らが流罪になつた建永2年(1207)2月の法難(建永の法難)では、住蓮、安樂が斬罪になっていますが、浄土宗ではその二人のことしか言わないのです。ところが真宗系では、その時に同じく二人が死罪になっている。そのことは親鸞聖人の孫にあたる覚如が詞書を記したとされる真宗系の法然上人の伝記である『拾遺古徳伝絵』に、善綽房西意、性願房として名前が出てきます。この二人のことは、浄土宗側の史料にはあまり出てこないからというので、これまであまり注目をされてこなかったのです。

ところが、昭和54年(1979)8月に滋賀県教育委員会が、甲賀郡(現甲賀市)信楽町の真言宗寺院である玉桂寺の阿弥陀如来立像⁷⁾の修理をする際に発見された胎内文書から、法然上人の弟子である勢観房源智上人の自筆の造立願文が発見されました。このことは私も「勢観房源智の勸進と念仏衆」と題した論文を執筆し、この著書にも収録しています。その願文のほかに道俗結縁者の名前を記した父名^{きんぎょう}という史料があり、その中に善綽房西意、性願房の二人の名前が出てきました。それは真宗系の伝記ともぴたり符合するわけです。

仏教と祖先信仰、『村落同族祭祀の研究』などのほか、著作集全九巻がある。

(4) 三品彰英(1902—1971) 歴史学者、神話学者。大谷大学教授、同志社大学教授、大阪市立博物館長を経て、佛教大学教授。著書に『日鮮神話伝説の研究』、『建国神話論考』などのほか、論文集全六巻がある。

(5) 萩原龍夫(1916—1985) 民俗学者、日本史研究者。東京学芸大学助教授を経て明治大学教授。著書に『中世祭祀組織の研究』、『神々と村落』、『巫女と仏教史』などがある。

(6) 「興福寺奏状」に関しては、近年、城福雅伸氏、森新之介氏、楠淳證氏、坪井剛氏などの研究がある。

(7) この阿弥陀如来立像は、平成22年2月「宗祖法然上人八百年大遠忌」記念事業として玉桂寺より浄土宗に譲渡された。



仏教美術研究の中で出会った一冊

仏教学部仏教学科教授 大西 磨希子

研究の原点ともいえる
大学時代のことをお聞かせください。

仏教美術史、東洋美術史が私の研究分野ですが、恥ずかしながら大学に入学したときは美術史という学問領域の存在を知りませんでした。歴史や思想史に関心がありましたので、一般教養で仏教概論の授業などを履修する中で仏教美術に出会いました。子供の頃から絵を描くのが好きだったこともあり、それで仏教美術史を専攻するようになりしました。卒業論文では、兵庫県小野市の浄土寺に安置されている仏師快慶の若い頃の大作「阿弥陀三尊像」を題材に研究を行いました。小野市は高校時代に通学していた町。浄土寺の「阿弥陀三尊像」は私にとって最も身近な国宝だったのです。

仏像は通常、別の場所で作ったものを運んできて安置しますが、浄土寺の

阿弥陀三尊像はお堂と一体になっています。外見からはお堂の中の須弥壇の上に立っていらっしゃるのを見えますが、実は三尊の根幹材は須弥壇を貫通して床下まで届いていて、それがお堂の柱と貫つなげて倒れないようになっています。本堂にお堂と一体になっているのです。卒業論文を書いている時、どうしてもそれが見たくて、ご住職にお願いをして床下に入らせていただきました。腹ばいになりながら床下を少しずつ進んでそれをじかに見たときの感動はいまでも鮮明に覚えています。

大学院では中国敦煌莫高窟の研究もされたとお聞かしていますが…

大学院修士課程までは平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての仏教美術史を中心に研究していましたが、博士

研究書ではどのようなものが
印象に残っていますか？

敦煌に残る仏教美術の研究をしている人にとって必読書の一冊といえるのが、東洋美術史の研究者で、敦煌絵画の研究で世界的に著名な松本栄一博士の『敦煌画の研究』（日本学士院恩賜賞受賞）です。私も大学院時代に研究助成を受けて購入しました。1900年代初頭に西欧の探検家が敦煌を調査した時に撮ってきた写真や持ち帰った史料の調査・研究結果をまとめたもので、1937年の出版ですが、いまだに敦煌研究者がまず参照すべき研究成果と言われています。

また、奈良県当麻寺所蔵の国宝「当

課程のときに朝日新聞社主催の敦煌研究員派遣制度に参加したことが契機となり、中国の仏教美術史へ研究領域を広げました。

敦煌へは以来毎年出かけて莫高窟の壁画の研究を続けています。3日間午前午後を通して懐中電灯と単眼鏡を片手に壁画をスケッチし続けたこともあります。学部卒業論文以来、阿弥陀仏を中心に仏教美術史を研究してきましたので、敦煌でも阿弥陀仏の浄土を描いた西方浄土変、すなわち西方極楽浄土の壁画を中心に調べてきました。

『西方浄土変の研究』（中央公論美術出版・2007年）は、そうした大学院時代の論文や研究の成果をまとめたものです。三部構成で、第一部が「唐代の西方浄土変」、第二部が「日本における展開」、第三部が「資料篇」になっています。第一部と第三部に博士課程時代の敦煌での研究成果や石窟内での

麻曼荼羅」を分割して原寸で再現した復刻図集（『国宝綴織当麻曼荼羅』も、大学院時代の私には垂涎の研究資料でした。本来曼荼羅は密教の世界観を絵にしたものですが、西方浄土変のことを平安時代の人は浄土曼荼羅や極楽曼荼羅と呼んでいました。当麻寺曼荼羅はその浄土曼荼羅です。敦煌にもほぼ同時代のものがありますが、經典と照らし合わせて、どちらがその世界観を正確に表しているかといえば、これは比較にならないほど当麻曼荼羅の方が正確です。したがって西方浄土変の研究では避けて通れない研究対象になっています。

当麻曼荼羅は仏教美術の研究において
それほど重要なものですね。

西方浄土変の研究を最初に始めたのは、鎌倉時代の日本人です。法然上人のお弟子さんの一人、証空上人が当麻寺を参詣してこの曼荼羅を拝見し、その写しを諸国に安置するなどして全国に広めたことがきっかけとなっています。当麻曼荼羅は中国唐代の善導大師の『観無量寿経疏』の解釈に沿った図柄になっており、日本浄土教の中で非常に重要な位置を占めるものです。鎌





浄土教のことを知らなければ曼荼羅の図様も正しく理解することができま

す。浄土教のことを知らなければ曼荼羅の図様も正しく理解することができま

す。浄土教のことを知らなければ曼荼羅の図様も正しく理解することができま

す。浄土教のことを知らなければ曼荼羅の図様も正しく理解することができま

す。浄土教のことを知らなければ曼荼羅の図様も正しく理解することができま

す。浄土教のことを知らなければ曼荼羅の図様も正しく理解することができま

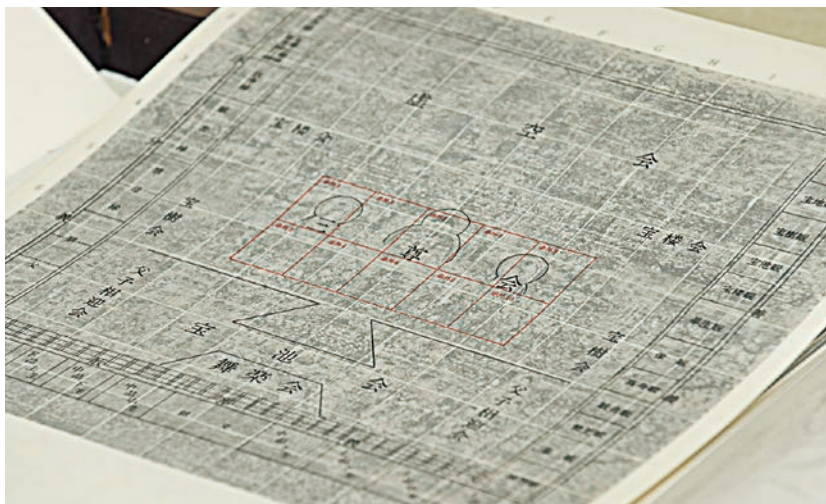
す。浄土教のことを知らなければ曼荼羅の図様も正しく理解することができま

す。浄土教のことを知らなければ曼荼羅の図様も正しく理解することができま

す。浄土教のことを知らなければ曼荼羅の図様も正しく理解することができま

す。浄土教のことを知らなければ曼荼羅の図様も正しく理解することができま

す。浄土教のことを知らなければ曼荼羅の図様も正しく理解することができま



倉時代以降、特に近世の浄土宗の僧侶が当麻曼荼羅の図様解釈を引き継いでこれしました。

現物の当麻曼荼羅はほぼ4メートル四方の「つづれ織り」の織物です。唐の時代の中国から伝来したものと考えられますが、当時の中国の規定では、

つづれ織りは国外に持ち出せないことになっていましたの

で、これは当時の正式な外交ルートで渡ってきたと考えていいでしょう。現在日本で織られているつづれ織りは1寸幅（約3.03cm）に縦糸が40本使われているようですが、当麻曼荼羅は1寸幅に60本の縦糸が使われています。図柄に沿って糸を絡めていく手の込んだ細かな作業を、おそらく目のいい若いお嬢さんたちが集められて織ったものではないでしょうか。

大学院時代、当麻曼荼羅の復刻図集をもとに描き起こし図を作成するために、数週間かけてせつせとトレースしたこともありました。当時通っていた大学の図書館には所蔵されていなかったため、他大学に通い

せん。仏教美術史の場合は図柄の典拠を説明したら終わり、というようなことがあります。たとえば、この仏さんは薬壺を持っているからお薬師さん（薬師如来）とか、絵柄のもとになっている文章を經典の中で探して、ぴたっと合うのがあればそれでよし、というように、表面的な読み方をする場合があるんです。でもそれでは間違える可能性があります。同じような表現が他の經典にある場合もあります。

浄土教の場合は阿弥陀仏の本願に依って西方極楽浄土に行ってそこで悟りを得ていくわけです。その往生浄土の方法を説いたのが『観無量寿経』です。具体的にこうしなさいとか、食事の時には忘れてもいいけれどそれ以外の時はこうしなさいとか、阿弥陀さんを観るときには白毫から始めなさいとか、いろいろ書かれています。また、これをしたら罪も全部消えるとか、阿弥陀仏の化身が表れて励ましてくれるとか、そういうことも説かれています。それを信じて実践していた人がいるわけです。それと一緒になって補助的なものとして造形芸術が出てきます。ですから、信じる信じないは別として、ただ書いてある字面を追うのではなくて、それを信じ実践していた人がいるというこ

詰めて写しました。図柄としても織物の技術を知る上でも、超一級の研究資料です。佛教大学の図書館にも収蔵されていますので、ぜひ見ていただきたいです。

最も影響を受けた研究書を一冊挙げるとしたら何でしょう？

私が仏教美術史、東洋美術史の研究を進めていく上で一番影響を受けたのは、浄土宗の僧侶であり、京都大学人文科学研究所の所長や京都国立博物館の館長もされていた塚本善隆先生のご研究です。佛教大学でもお教えになられていた方で、中国仏教史学の第一人者と言っている研究者です。先生が研究をされた後はすべて刈り取られて草一本残っていない、そんな感じを与えるくらい偉大な研究者です。宗教者としての実践や体験を踏まえた研究をされるので、文献だけをにした仏教史や浄土教理史とはひと味もふた味も違います。目の前が二気に開けるような研究成果ばかりで、とても感銘を受けました。丹念に文献資料を読み解いて根拠が提示されている上に、その時代の人々にとつての救いとは何かというようなことも理解して書かれているので、ご自身が浄土宗僧侶として生きてこら

とも理解して研究をする必要があると思います。そういうことを気づかせてくださったのが塚本先生でした。その著作集に出会ったときは本当に感激しました。私が最も尊敬する研究者の一人です。

最後に、図書館の活用方法についてアドバイスをお願いします。

大学に入った時から図書館にはよく通っていました。大学図書館には貴重な書物や文献がたくさん収められています。塚本先生の著作集も佛教大学の図書館には遺贈されたものを含めると10セット以上あるとお聞きしています。まさに宝庫です。「えっ！」と思うような貴重な本がたくさんあって、多くが開架式になっていますので、手に取ってみたい、どんな本があるのか背表紙を眺めて見るだけでも贅沢なことだと思います。

若いころは夏目漱石や森鷗外が好きでしたので小説もよく読みました。古典でもいまの自分の感覚にぴったりくる作品があります。描かれている人物像がいま生きている自分と同年代。そういう作品を若い時に多く読んで、感性を豊かにしていったほうがいいと思います。



おおにし まき こ
大西磨希子
仏教学部仏教学科教授

2002年早稲田大学大学院文学研究科芸術学（美術史）博士後期課程単位取得満期退学。博士（文学）。研究分野は東洋美術史、仏教美術史。著書に、『西方浄土変の研究』（中央公論美術出版、2007年）、論文に「綴織当麻曼荼羅の九品来迎図に関する復元的考察」（『印度學佛教學研究』第63巻第1号、2014年）などがある。



保育の歴史的研究と実践記録集（復刻版）の刊行に寄せて

社会福祉学部社会福祉学科教授

渡邊 保博

1 実践記録集の復刻版刊行

最近、わが国の保育の歴史的研究に必要不可欠な重要文献や実践記録の復刻版の刊行（いずれも日本図書センター）が続いている。保育の歴史的・実践史的研究に関心をもつ私にとってうれしい限りである。

たとえば、①江戸時代から明治、大正、昭和の各年代にわたる「わが国初の」総合的・先駆的な保育史研究である『日本幼児保育史』（日本保育学会、全六巻、2010）、②1960年代後半、高度経済成長の終焉とともに脚光を浴びはじめた保育問題とその背後にある社会の要請に応えるために「科学的基礎に基づき研究された、現在の『保育学』の原点」といわれる『保育学講座』（日本保育学会監修、全十巻、2011）、③貴重な写真・図版600点を集録し「日本の幼児保育史における総合的・本格的にまとめられたはじめての写真資料集」である『幼児保育百年の歩み』（日本保育学会編、全一巻、2015）、④「保育界をその理論・実践両面から強力に牽引したまぼろしの保育雑誌」といわれる『保育』（戦後編

1・1945―1955、全日本保育連盟編、全十五巻、2014）、⑤「子どもに寄りそって葛藤を続けてきた現場の保育者たちの挑戦」を伝える『戦後幼児教育・保育実践記録集』（太田素子監修、全二十九巻、2014―2015）などである。本学は①②③の原本を所蔵している。④はこれから購入を検討することになるだろうが、⑤は図書館に配架されており、収録書の何巻かは原本も所蔵している。なお、この『実践記録集』に先立って、戦後の代表的な実践記録書59巻をとり上げ、それぞれの概要を解説した『保育実践のまなざし』（六戸健夫ほか編著、かもがわ出版、2010）が刊行されている。

この復刻ブームはなぜだろう。戦後保育の大転換ともいえる子ども・子育て新制度が2015年度からスタートする中で、これまで保育関係者の「思考を動かし行動を促」してきたものは何であったか、保育は今後どうあるべきかを考えること、つまり「過去をつかつて未来のために考える」（キャロル・グラック『歴史で考える』岩波書店、2007、3―14頁）ことが痛切に求められているからかもしれない。ここで特にとり上げてみたい『戦後幼児教育・保育実践

記録集』の監修にあたった太田素子は、刊行の意義を次のように説明している。

つまり、①幼児教育・保育の新制度移行という「改革期」にあたって「とくに問われるのが『保育の質』とは何か」であり、「戦後七十年近く、保育者と国民が築き上げてきた保育実践の積み重ねのなかに『保育の質』を考える手がかりを確認」し、「幼・保の垣根を超えた研究交流」「地域や家庭の教育力」「乳幼児の自主的な人格の育ちと小学校教育への接続教育」などの重要課題について「今につながる解答の萌芽」

を探りたい、②「グローバルな保育実践の研究交流の進展のなかで、改めて日本の保育実践が積み上げてきたもの」を「具体的に、比較社会史の視野を持って明らかに」しておきたい、③「授業研究の発展や、ナラティブ・アプローチの浸透によって、実践記録への注目と保育実践を研究する方法が進化している」なかで、「記録を収集しながら、記録のとり方とその分析方法など、『実践を記録する』という営みについても考えたい」からだ。

この趣旨からすれば、災害からの復興に果たした保育所保育の記録という点で、「伊勢湾台風」の生々しい爪痕から生まれた泥の町ヤジエ―その底辺の保育園に若い情熱を燃やして飛び込んだ二十代の2人の保母の生活と闘いの記録』である『レンガの子ども』（原田嘉美子・難波ふじ江著、光風社、1962／東芝日曜劇場・第335回、1963.5.5、出演：香川京子、渡辺美佐子、山本学など）もとりあげてほしい。

2 刊行された実践記録書の背後には無数の記録が

さて、保育・幼児教育の記録といえば、保育の仕事は記録とともにあり、書かなければならない記録も多い。たとえば、「保育所児童保育要録」「幼稚園幼児指導要録」をはじめ保育所・幼稚園の管理運営に関わる公的な記録である。子どもの入園・卒園・転園、クラス編成、健康診断、職員の異動などの記録もある。また、保育者（反省的実践家）は自分たちの保育を計画し、実践し、反省した記録を残している。



民間の保育研究運動団体の機関誌（左）と実践報告集（右）

たとえば、保育の計画、総括会議などの記録、日々の日誌、家庭へのお便りや連絡帳、保育者の個人的なメモなどもある。記録の方法という点では、文書・音声・写真・映像記録や子どもたちの作品などもある。これらの記録は、各園の保育の実施と改善のために一人ひとりの保育者が作成した記録である。ということは、公刊・複製された実践記録書の背後には、保育の歴史の中で保育者たちが書き残した無数の記録があるということでもある。『戦後幼児教育・保育実践記録集』は、全保育記録からみれば氷山の一角に過ぎないが、だからこそ貴重な記録書であるといえる。

3 創造的実践家と記録

「実践記録」とは、いうまでもなく保育・教育実践の記録である。この〈教育実践〉ということばは、「教育・保育の現場は」時々為政者に無批判に追従したり、研究者が紹介する教育理論をただ適用するところではない。まさに、教育を実際に行う教師こそが、教育と研究を行う主体でなければならない…というメッセージ」を込めて、「第二次世界大戦前に使用されはじめた（田中耕治編著『時代を開いた教師たち』日本標準、2005、14頁）といわれている。つまり、教師や保育者が「日々の仕事の質を高めていくためには、自らの教育的営為を、主体的に…問い直していくことの重要性を自覚して」（中野光「教師が実践記録を書くとき」本荘正美『新たな自分に出会うとき』新読書社、1995、12〜18頁）いく中で使わ

れるようになったという。「実践記録」には、主体的・創造的実践家であろうとする保育者・教師の決意がこめられているのである。

もちろん、保育者・教師のみならず、創造的実践家はその実践の記録を付けている。北京オリンピックで金メダルを獲得した女子ソフトボールチームのピッチャー上野由岐子も、日本代表の元監督宇津木妙子などから、「大事なことを忘れ」ないよう、また「自分の考えをまとめ、整理する癖をつけ」（松瀬学『サムライハート上野由岐子』集英社、2008、133頁・197〜198頁）るために練習ノートや日記を書くことを強く求められたという。

4 実践記録の意味

保育は同じことのくり返しはない「二回性」の世界であり、一つ一つの出来事、子どもの行為のなかに意味を見いだすのでなければ、大事なことを見落とし忘れたままにしてしまうことになる。だから、日々の保育の記録とふり返りがなければ明日の保育に展望をもつことができない。ここでは、それまでの枠組みで解決できる「小さな経験」だけではなく、それまでの枠組みを変えないと解決していけない「大きな経験」（ボルノー『認識の哲学』理想社、1975、269〜270頁）も記録されることになる。

ところで、保育者の手書きによる記録も含めると、実践記録には以下のような意味がある。①子どもたちの生活とその思いや願いをつかむ、②「記録表現を通しての保育者自身が自分の実践をモニターし、変

革する主体になる」、③よりよい保育を探索する時の根拠・データをつくる、④保育者同士が読み合い、他者の視点を通して理解を深め、暗黙の信念や価値観によって自分では気づかないでいることを自覚し、そのことを通して保育者集団をつくる（「自分の保育から自分たちの保育へ」、⑤「記録集にまとめ、母親の啓蒙や保育研究運動の資料にする」、⑥園と親、親同士のコミュニケーションの貴重な方法、といった意味である。また、実践記録は他の生活記録と同様、子どもにとっては愛された証ともなり、思春期に揺れた子どもたちがその記録を読み、「自分はこんなにかわいがられていた」ことに気づき、立ち直っていくこともある。

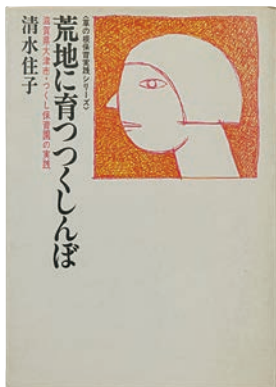
ここで参考にした実践記録論の歴史的な文書は、①『保育の現場から』（東京保育問題研究会編、勁草書房、1980）、②『保育に生かす記録の書き方』（今井和子編著、ひとなる書房、1993）③『どうこい北田辺は生きつづけた』（戸田円八郎・戸田節子、さ・さ・ら書房、1980）、④『教育実践の創造に学ぶ』（碓井岑夫、日本教育新聞社、1982）などである。本学図書館は①②を所蔵している。

5 保育の実践記録書が大学図書館で読めるというって

さて、実践記録集の復刻は喜ばしいが、保育の実践史的研究はまだまだこれからだというのが実感である。この点について、わが国の保育の歴史的研究の碩学である穴戸健夫氏が、次のように指摘したこ

とがある。つまり、戦後の歴史研究は、幼児保育の通史的研究、あるいは「思想史」「地方史」「人物史」「運動史」などの分野で成果をあげてきた。しかし、なお「制度・思想・施設など狭い分野にかぎられており、保育内容・方法・カリキュラムといった「保育実践に直接かかわっている分野の歴史的研究」が不十分であると（穴戸『日本の幼児保育』上、青木書店、1988、10頁）。その後、この分野の研究が少しずつ蓄積されつつあるが、なお「薄明への接近」でもいいうべき状況である。

もちろん、「制度・施設・思想」が保育に影響を与えるということはいうまでもないし、その切り口からの研究は重要である。しかし、保育の制度・思想が一方的に保育者の意識と行動を左右したり、保育のあり方を規定することはない。制度・施設などに不備や問題があっても、保育者たちは、その「マイナス（困難や障害）」の中にプラスの芽を見出し…プラス面によつてマイナス面を克服」（清水住子『荒地に育つくしんぼ』さ・さ・ら書房、1976、234頁）してきた。



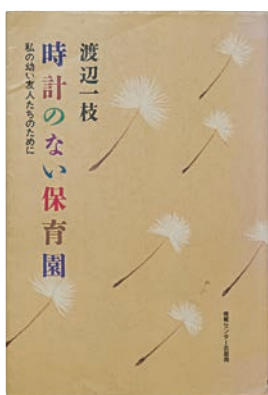
つまり、保育者は、自らが生きた時代の制度や思想と向き合い、自らの価値観や子ども観などを問い



保育者や保護者が採集した子どもの言葉（口頭詩）集。幼い子は詩人のように語り、科学者のように考える。1972年版。



幼稚園の実践記録。「くずかごのなかにこそ、ほんとうの子どもたちの足あと、心の状態が表れている」という。1974年。



保育園の実践記録。「刻を紡ぐ主人公」である幼い人に「いったいどうして時計が必要なのでしょう」と問いかける。1987年。

なおしながら、時代を拓く新たな実践を生みだしていったのである。その意味で、保育者は有力な歴史的主体だったし、その実践の歴史的研究・学習が必要である。それぞれの時代を生きた保育者たちが、制度や思想と格闘しながら生みだしていった保育の価値（思想、子ども観、目標・内容・方法観など）とその生き方が刻み込まれた実践記録を、保育者養成学校の教員や学生が大学図書館で読むことができる意味は大きいといえるだろう。

わたなべやすひろ
渡邉保博
社会福祉学部社会福祉学科教授
社会福祉学部長

1980年京都大学教育学研究科教育学博士課程中退。静岡大学名誉教授。研究分野は乳幼児保育学。著書論文に、『保育実践のまなざし』（かもがわ出版、2010年、共著）、「異年齢保育が提起するもの」（『季刊保育問題研究』270号、2014年）、『保育スキーマの「継続的再構成」と組織的研修の役割に関する実践史的研究』（『保育学研究』第52巻第1号、2014年）などがある。



『京都上京 中小川町文書』

はじめに

平成26年度に佛教大学附属図書館（以下、「図書館」と略す。）に収蔵された「京都上京 中小川町文書」（以下、中小川町文書と略す。）は550点を数える文書群である。年紀が明らかなものでいえば、享保18年（1733）や寛保元年（1741）などで18世紀中期の文書を数点含みながら、明治39年（1906）までの文書で構成されている。全体的にみれば、寛政年間（1789～1801）から明治10年代（1877～1886）までの一紙文書・縦帳類が中心になっている。

中小川町文書とは当該の文書群の仮称である。文書群は「年寄」、「五人組」あるいは「中小川町中」に宛てた文書群（以下、町文書群と記載する）と、中小川町に居住していた医家・親康家の家文書（以下、親康家文書群と記載する）に分けることができる。町文書群と親康家文書群が一括され伝来した経緯は不明である。以下、町文書群と親康家文書群とに分けて、その概略を報告する。なお、中小川町は京都御苑の西側地区、小川通今出川上るに位置する両側町である。江戸時代は上京小川組上小川十一町組に属し、明治2年（1869）に

上京十二番組、明治5年（1872）に上京第九区、京都市の市制施行により明治25年（1892）からは上京区第八学区に所属した。

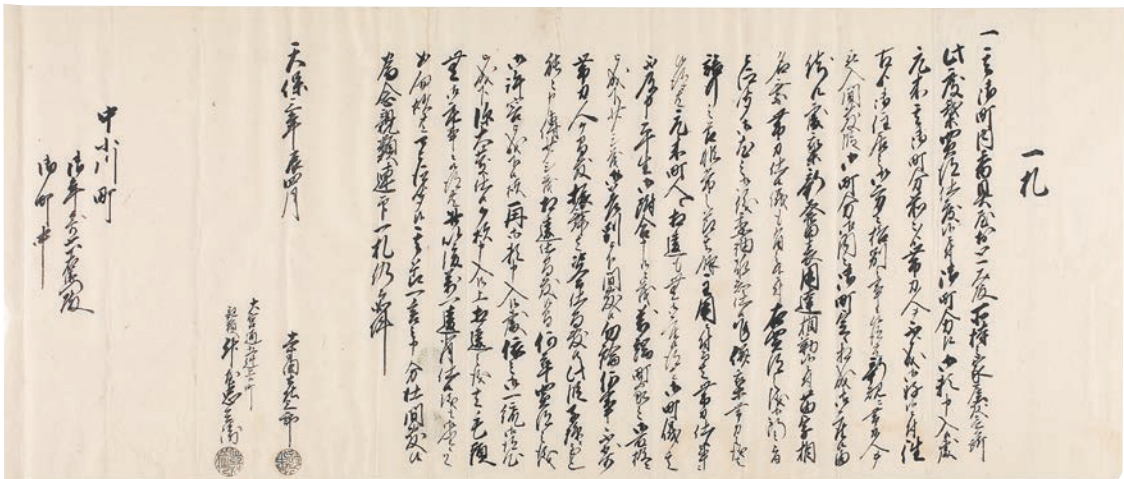
町文書群の構成と特色

中小川町文書のうち町文書群は、横帳8点、縦帳33点、数点の断簡・包み紙と約490点の一紙文書で構成されている。一紙文書は入用銀覚や金銭の借用証文、寺請状・送籍状や借家請状、屋敷の売買証文や譲状といった居住者の出入りや屋敷所有に関する文書が多い。入用銀覚のなかに町組を上京ごとに取りまとめた組織「大仲」の諸入用銀についての覚えが複数含まれている。また、文化年間から文政年間にかけて町組がそろって役人化した町代を訴えた町代改儀一件に関わると思われる文書が2点確認できる。その一つは「申合之事（町代一件二付）」であり、もう一点は文政12年（1829）「為取替一札之事（組町二相用挑灯之相印二付）」で、小川組の年寄・五人組の署名および連印がある。町代改儀一件に関わる文書は京都の各町に残されているが、この2点の文書もその一つである。

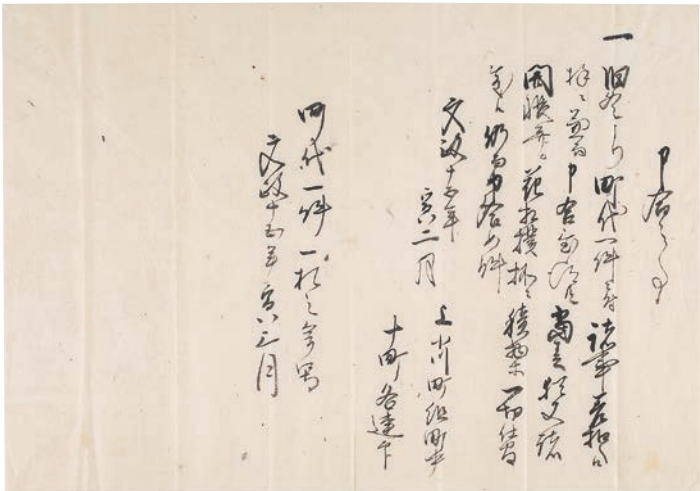
寺請状や屋敷売買証文・譲状などは、中小川町の住民構成や屋敷所有の状況についてまとまった史料が見当たらない現時点では、それらの一端をうかがい知ることができる文書である。そのなかで目を引くのは、第一に多氏・中西氏の地下官人の屋敷所有を示す文書が散見することである。江戸時代の地下官人については職掌等を中心に研究の蓄積が進んでいるが、居住の実態や屋敷所有などについては依然として不明な点が多い。町文書群では、多氏については文政元年（1818）の多周防關所に関わる文書のほか、多大和守後家・多大和守

伴対馬守久視（養子）・多右近将曹（久視の子、久隆の養子）と三代にわたる屋敷所有を示す譲状がある。『地下家伝』によれば、多久隆（1748～1816）の多大和守任官は安永5年（1776）のことである。中西氏については、文書に中西筑前介・中西政之丞、中西加賀介の名があるが、『地下家伝』には記載がない。また、地下官人と直接的な関係を示すものではないが、中小川町と朝廷とのかわりを示す「左近府兄部座人御役儀」に関する天保7年（1836）の文書が4点あり、縦帳にも天保7年「御請書（左近府兄部座人挑灯二付）」一冊がある。これらの文書は中小川町が御所の近隣に位置していたことと無関係ではないと思われる。

二つ目は図書館に所蔵されている「寺田家文書」



町文書（江戸期）『一札（帯刀人家屋敷買得之御許容之儀二付）』



町文書（江戸期）『申合之事（町代一件二付）』

歴史学部歴史文化学科教授

渡邊 秀一

と関わる文書が数点含まれていることである。寺田家は新発田藩京都留守居を務めた家で、寺田喜三郎が中小川町に家屋敷を所有していたのである。町文書群の天保3年（1832）「帯刀人家屋敷買得之御許容之儀二付」は寺田喜三郎と親類の升屋忠兵衛が中小川町年寄と町中に宛てて差し出した文書である。また、帯刀人である寺田喜三郎の屋敷所有を認めたことに関連して、天保3年「寺田喜三郎之例を用ひ帯刀人吹等致間鋪候二付一札」が作成されている。寺田喜三郎の屋敷所有を特例として、以後の帯刀人による町内屋敷の所有を禁じたようである。さらに、寺田喜三郎の屋敷所有については天保11年（1840）「一札（藤屋儀兵衛当町内所持家屋敷寺田喜三郎江壳渡二付）」が残っている。

横帳は数も少なく、文政～嘉永期の入用覚がほとんどである。また、縦帳は年紀の記載がないものが多い。縦帳の中で全体の三分の一の11冊を占めるのが「御触書」である。「御触書」は町組に回覧されてきた町触の写しをまとめたものである。なお、一紙文書のなかに「御触書」一点がある。その他は文政5年（1822）から明治11年（1878）までのものである。江戸時代の主なものは、文政5年「会所入年月控席順議定書」、文政7年（1824）「新規西高瀬通船路出来二付一札」、

天保2年（1831）「捨子之一件（捨子入用・遺ス品物二付）」、天保10年（1839）「乍恐口上書（女子捨置候二付）」、などである。文政5年の豎帳は町会所における寄合の際の席順を定めたものである。「会所入年月」とあるのは、寄合における発言権は平等であったものの、会所内の席順に先住者を優位とする秩序があったためである。文政7年の「新規西高瀬通船路出来」は同年に堀川榎木町の冷泉井堰から取水し天神川下流へつなげる運河の開削が計画されたことに関わるものである。ただ、新運河の開削は葛野郡十二か村の反対で実現していない。

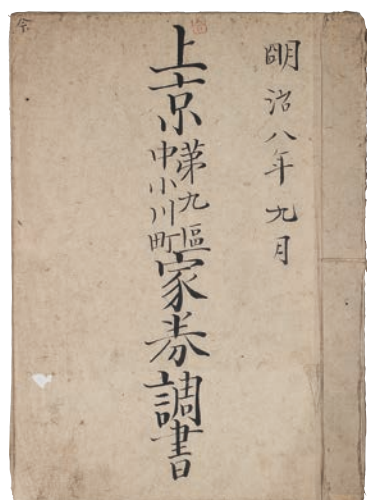
明治時代初期の豎帳には、明治8年（1875）「上京第九区中小川町家券調書」、明治10年（1877）「地所間数取調書」、明治13年（1880）「市街地坪数地価合計帳」の3冊がある。「地所間数取調書」は明治10年に土地丈量を目的として京都府が布達した「市街改租人民心得書」に基づいて作製されたもので、京都市内のいくつかの町でも確認できる。また、「市街地坪数地価合計帳」は改租結果を町全体でまとめた帳面である。「家券調書」は家屋の所有者名、建坪、その価格などが記載されている。家券は京都府が土地価格しか表示しない地券に加えて、建物価格を記載して発行したもので、「家券調書」はその下調書であろう。家

付」と、明治3年（1870）「医員座次」がある。その他、「勘例」4点がある。勘例とは諮問された事柄を調査して報告（勘申）を行った文書である。そのうちの一点は安政6年（1859）10月21日の年紀があり、「大隅介源信達」に宛てたものであ

親康家文書「親類書」



町文書（明治期）『上京第九区中小川町家券調書』



券の発行は一部府県に限られており、しかも明治9年の「諸建物書人質規則並売買譲渡規則」によって廃止されている。家券が残されていることはしばしばあるが、その下調書が町単位で残っていることは稀である。江戸時代から明治初期にかけての屋敷所有の変化を知るうえでも貴重な文書と言えよう。

親康家文書群

親康家は代々医業を生業としてきた家である。中小川町に居を定めた時期は明らかではないが、寛政10年（1798）にはすでに中小川町に屋敷

り、別の一点は年紀不明ながら「典葉寮医師源正文」宛てになっている。叙位に関する文書は「法橋・法眼叙位二付例書」、「従六位下丹波頼吉」宛ての「申文（正六位下）」、「大隅介丹波頼吉」宛ての「豊前介申文」などで、ともに年紀不明である。

親康家の家政文書は家系図、親類書および親類書下書、「家督相続二付書状」、享和2年（1802）「宗門改書付雛型」などである。「家督相続二付書状」の端裏書には「土山淡路守、親康頼吉様、武宗御殿」と記載がされている。また、「宗門改書付雛型」は文化6年（1809）の宗門改の際に雛型として使用するよう指示する文言がある。

おわりに

江戸時代の中小川町については三十四軒役を務めていたことなどを除けば、詳細は明らかではない。公家屋敷や諸大名の京屋敷があったという事実はないが、周辺の各町には近衛家の桜御殿や入江家といった公家、江戸幕府との関わりが強い本阿弥家や後藤家といった上京の町衆、武士や医師らの屋敷があり、御所・公家町に隣接した地域特有の環境の中にあった。また、明治時代の中小川町についても詳細が不明な点は同じである。明治時代の中小川町は御所周辺に位置していたがゆえに明治維新にともなう天皇東遷の直接的な影響を被った

を所有していたことが確認できる（寛政10年「札之事（町役儀何茂町並二可仕候二付）」）。「地所間数取調書」によれば、親康家は明治10年（1877）の時点で小川通今出川南東角に居宅を構えていた。文化年間以前の『平安人物志』にはその名を見いだすことはできないが、文政13年（1830）『文政寅再刻 平安人物志』に「丹波惣安 一名光端 字子的号東岸 小川今出川北 親康法眼」と、医師としての記載がある。天保9年（1838）刊行の『平安人物志』にも親康法眼の名が記載され、天保14年（1843）『天保医鑑』から親康法眼が口中科の医師であったことがわかっている。また、慶応3年（1867）『慶応三卯改刻 平安人物志』には「丹波頼吉 字 号 小川今出川北 親康大隅介」と記載されている。明治31年（1898）に親康頼順が記した「親類書」によれば、祖父親康忠順（丹波惣安）は元高槻藩医で、典葉寮医師を務め、父頼吉も同じく典葉寮医師を務めたことが記載されている。頼吉とは親康大隅介のことである。

親康家文書群は家業および叙位に関する文書と家政に関わる文書に分けられる。家業に関わる文書の中には「藤木近江守・山本典葉大允」を差出人とし、「典葉寮医師親康大隅介」宛ての万延元年（1860）「奉願口上覚（典葉寮伝奏型御支配二

と思われる。

こうした中小川町を取り巻く環境の変化は、中小川町だけのものではない。18世紀末から19世紀中ごろという限られた時期の文書群ではあるが、これらによって江戸時代から明治時代にかけての中小川町、ひいては御所西側地区の状況が少しでも明らかになることを期待したい。

わたなべひでかず
渡邊秀一
歴史学部歴史文化学科教授
歴史学部長

1985年立命館大学文学研究科地理学博士前期課程修了。研究分野は歴史地理学、集落地理学、地図史。著書論文に、『京都の門前町と地域自立』（晃洋書房、2007年、共著）『西京邑田畑惣絵図』からみた近世西京村の特性」（佛教大学総合研究所紀要別冊『洛中周辺地域の歴史の変容に関する総合的研究』、2013年）などがある。



1. はじめに

2015年3月13日、「佛教大学図書館ポータルサイト」は、BIRD（Bukkyo University Library's Information & Research Databases）と名前を変えて、装いも新たに再出発することになった。ここではそこに込められたコンセプトと、おすすめしたい活用のコツについて述べてみたい。



図1 BIRD (<http://bird.bukkyo-u.ac.jp/>)

2. お気軽検索

近年、図書館のコンテンツは、電子ジャーナルやデータベースの普及に伴い、形態や種類の面で多様化しつつあるが、こういった情報は従来の「紙」の図書と異なり、そのままでは学生の目に触れにくい。つまり、図書館が積極的に存在を知らしめる仕組みを設けない限り、十分に利用されない可能性がある。正直なところ、これは図書館にとっても、利用者にとっても望ましいことではない。

これに対応するために、佛教大学附属図書館（以下、図書館と略す。）は、従来の「佛教大学図書館ポータルサイト」の時代から、「お気軽検索」との愛称を与えられた統合検索の仕組みを活用してきた。すなわち、図書館で講読できる電子ジャーナルやデータベースをOPACの「紙」の蔵書データと共に「まとめて」検索できるシステムを提供することで、利用者が電子コンテンツの存在を発見しやすい環境を作ってきたのである。

とはいえ、お気軽検索は従来からの「紙」の資料を検索する際にも、想像以上の力を発揮できるツールである。そこで、ここでは改めてお気軽検索での資料検索に関して、いくつかトピックを挙げておこう。

2.1. 蔵書検索

図書館の蔵書、つまり「紙」の図書や雑誌を検索する場合には、OPACを使うのが一般的である。だが敢えてお気軽検索を使うことで、より「深い」検索結果を得ることができる可能性がある。

たとえば「手術部位感染」という言葉でOPACの検索を行ったとしよう。つまり「手術部位感染」に関する「紙」の図書を探したいという場合である。この場合OPACにおいては、検索結果は0件となっている。

だが、お気軽検索ではどうだろうか。「手術部位感染」の検索結果から、「図書館OPACにある文献」という項目にチェックを入れ、絞り込みを行うと検索結果として1件ヒットする。

レコードを確認すると、二条図書室に所蔵があり、確かに本学で所蔵されている「紙」の図書であることが分かる。しかも内容を確認すると、題材として「手術部位感染」を取り上げた図書で間違いがない。つまりお気軽検索ではOPACより、明らかに「深い」検索を行うことができるようになっていくことが分かる。

もちろん、すべての図書についてこういった「深い」検索ができるわけではない。だが、文献探索の可能性を広げる機能として、覚えておいていただければ、役に立つこともあるはずである。ぜひご活用いただきたい。

2.2. 論文検索

研究や学習を行う上で、論文は重要なコンテンツであることは言うまでもない。お気軽検索では、佛教大学で利用できる「電子」の英語論文約6327万件、日本語論文約1017万件、中国語論文約171万件などについて、アクセスするためのレコードを有している。こういったウェブサイト上で提供される「電子」の論文に関しては、もちろん検索結果のレコードからURLをたどることで、シームレスに目的の全文コンテンツにたどり着けることは間違いない。

だが、お気軽検索の特徴は、このような「電子」のコンテンツを簡単に発見し、利用できることだけではないのだ。たとえば、お気軽検索では「紙」の英語論文約1220万件、日本語論文約1923万件、中国語論文約47万件についても、デフォルトで検索が可能となっている。つまり、これらの「紙」の論文へのアクセスが簡単に行えるようになっていることも大きな特徴なのである。

具体的な流れである。たとえば「一闡提攷」という日本語

本文言語	
▼ すべて	
英語	63,267,334
日本語	10,174,802
中国語	1,713,260
ドイツ語	1,201,043
スペイン語	849,055
その他...	

図2 「電子」の論文件数に関する言語別内訳

画面左側の「絞り込み」用の領域を活用しなくてはならない。

たとえば、サンサーラの端末で「祇園祭」と検索してみる。この場合の検索結果を見ると、上位は全て図書と論文ばかりである。そこで画面左側の「絞り込み」用の領域の「フォーマット項目」で、「新聞記事」を選択する。すると、画面はすべて「新聞記事」のレコードのみ

を表示するようになる。

ちなみにこの「新聞記事」の大半は、佛教大学が京都新聞社の許諾を得て作成する「京都新聞データベース」によるものであり、学内ネットワークに接続した端末では、その紙面画像をウェブブラウザ上で閲覧することができるという特徴がある。ぜひ、ご利用いただきたい。

3. おわりに

実際には、BIRD でできることはお気軽検索の検索のみではない。たとえば、BIRD トップページの検索窓からは、デフォルトのお気軽検索、蔵書検索（OPAC）に加え、日本最大の辞書事典データベース「ジャパンナレッジ」が利用できるようになっている。ちなみに「ジャパンナレッジ」に関しては、学内ネットワークからの検索しか受け付けない。ただし、BIRD で提供される「リモートアクセスサービス」を用いれば、OS やブラウザの制限なく、専任教職員や学生については、自宅から「ジャパンナレッジ」を活用することができる。もちろん、この「リモートアクセス」を用いれば、他の多くの電子ジャーナルやデータベースを同様に利用することも可能だ。

また今年度から、「就職情報」のデータベースが大幅に充実し、上場企業であれば「平均年齢」「平均勤続年数」や「平均給与」などを調べることのできるデータベース「eol 企業ナビ」なども利用できるようになった。これらはお気軽検索での検索対象にはなっていないが、BIRD のトップページ中央下の「就職情報」をクリックすることで、リンクをたどってアクセスできるようになっている。業界研究や会社研究に活用いただきたい。

の論文を探したいとする。この場合、お気軽検索で「一聞提放」で検索を行うと、検索結果として 90 件程度のレコードが検索結果として出現する。ここで画面左側の「絞り込み」用の領域から「フォーマット」項目で「雑誌論文」「本文言語」項目で「日本語」を選択すると、レコードが 1 件に絞られる。

このレコードをクリックすると、中間画面を挟んで、目的の論文が含まれる『佛教大学研究紀要』第 40 号の配架場所を確認できる画面へと遷移する。つまり、これにより「紙」の論文であっても、その所蔵雑誌を簡単に「発見」できるようになっているのである。

お気軽検索は、「国立国会図書館雑誌記事索引」や「magazineplus」、「医中誌 web」といったデータベースの内容を収録しており、「紙」の論文を探すにしても、極めて効率的なツールといえる。図書館としては、ぜひお試しください。



図3 「紙」の論文レコード



図5 「新聞記事」のみに絞り込んだ画面



図4 『佛教大学研究紀要』第40号の所蔵場所を示すOPAC詳細画面

2.3. 新聞記事検索

お気軽検索では、新聞記事についても対応していることにお気づきだろうか。英語のものであれば約 3216 万件、日本語では約 76 万件の収録がある。だが、普通に検索を行っているとは、そういった記事を「発見」しにくいというのも事実なのだ。というのも、まず日本語の新聞記事の大半は佛教大学の学内ネットワークを経由して検索した場合のみ、表示されるという利用制限がある。加えて、新聞記事は図書や雑誌、論文に比べると検索結果における優先順位は高くないからだ。そこで、日本語の新聞記事を効率的に「発見」し、利用するためには、学内ネットワークを経由して検索した上で、

佛教大学附属図書館の事業活動報告

2014～2015年度前半期

2014年度

5月	6月	7月	9月	10月	12月	3月
図書館ポータルサイト説明会を開催（2015年1月）。	学部生対象図書館ツアーを開催（7月）。	古典籍利用講座を開催（2015年1月）。	図書館2階に朝日選書コーナーを設置。	佛教大学教育後援会の援助金により朝日選書を整備。	図書館2階に職員研修用図書コーナーを設置。	図書館報『常照』第61号を発行。
						ネットアドバンス社に46%Japan Knowledge Lib利用説明会を開催。
						プロネクサス社による90企業ナビ・日本の100万社利用セミナーを学生支援部進路就職課と合同で開催。
						図書館情報システムを更改（E-Cas Library5.0にバージョンアップ）。
						図書館ポータルサイトを、学術情報検索BIRDとしてバージョンアップ。
						図書館3階に社寺史料コーナー、浄土宗コーナーを整備し、日本史料史料コーナーを拡充。
特集コーナー・テーマ（2014年4月～2015年3月）						
4月～5月	5月～6月	7月	8月	9月	10月	11月
イタリアーその歴史と文化ー	江戸時代の思想家たち	シェイクスピアー作品とその時代ー	西行と定家ー乱世を生きた歌人ー	古代日本の宗教事情	近世絵画をめぐる旅ー近世京都画壇とその絵師たちー	戦後日本における思想の潮流
						Lyons名画座へのご招待
						諸子百家ー中国古代の思想家たちー
						幕末維新の群像ー動乱の時代を生き抜くー

2015年度

5月	7月	8月
学術情報検索BIRDの利用説明会を開催（2016年1月）。	図書館1階新着書コーナーを拡充。	独立行政法人国際交流基金の依頼により、ロシア連邦のエルミタージュ美術館、プーシキン美術館で開催される「楽茶碗の中の宇宙」展に、図書館所蔵の「洛中洛外図屏風」を貸出（11月まで）。
		図書館2階のマルチメディア学習室を多目的学習室に用途変更し、可動式テーブル、椅子、貸出用ノートパソコン10台を設置（ノートパソコンは総合カウンターで貸出対応）。



2階 多目的学習室

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

佛教大学附属図書館は、佛教大学の前身佛教専門学校があった京都市左京区鹿ヶ谷の地から、現在の京都市北区紫野に移転した1934（昭和9）年11月23日に木造2階建の閲覧室と、鉄筋コンクリート3階建の書庫を竣工落成しました。この図書館建設にあたっては、佛教専門学校初代校長である土川善激師（浄土宗大本山知恩寺68世住職）に深く帰依された篤志家上村常治郎氏のご遺族から多額の寄付をいただき、完成することができました。その後、1963（昭和38）年9月に開学50周年を記念して閲覧室、書庫などが増築され、1972（昭和47）年4月には、開学60周年記念事業として地上5階地下1階建て、研究室を配置した複合図書館棟が完成しました。現在の図書館は、開学80周年の記念事業として、同窓会、鷹陵同窓会などの卒業生、在学生ならび保護者、浄土宗寺院をはじめとした、本学有縁の方々からの多大な寄付によって、1995（平成7）年1月に着工し1997（平成9）年4月に竣工したものです。地上5階地下2階建て100万冊を収蔵することができます。

者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。この本額は佛教専門学校第7代校長江藤激英師（浄土宗大本山善導寺61世住職）によって撰述されたもので、現在は図書館1階に掲げられています。また、同じく1階に設置されている浄土宗総本山知恩院にある八角形の経蔵「転輪蔵」（略して輪蔵）の縮小複製は、1998（平成10）年5月、図書館開館1周年を記念して、佛教大学同窓会、鷹陵同窓会、通信教育部学友会、教育振興会から寄附されました。輪蔵は、1回転させることによって、一切経を読誦したることと同じ功德を得られるといわれています。



開学50周年記念事業で増築された図書館の玄関と閲覧室の概観（昭和38年9月）

佛教大学附属図書館報『常照』第62号

発行日 平成27年10月23日
 発行者 佛教大学附属図書館長 松田和信
 発行所 京都市北区紫野北花ノ坊町96
 佛教大学附属図書館
 制 作 株式会社栄美通信

後記

佛教大学附属図書館報『常照』第62号をお届けします。平成27年度から田中典彦学長、松田和信附属図書館長のもとで、新しい時代の大学図書館を目指して、整備を進めています。3月には学術論文、データベース、蔵書などを総合的に検索できる「学術情報検索BIRD」を公開。8月には2階に文献資料や電子情報などが活用できるアクティブ・ラーニングの拠点として、可動式の机、椅子を配置した「多目的学習室」がリニューアルし、ノートパソコンの貸出しも始めました。常に新たな発見ができる「空間」として、図書館を活用してください。